

と云ものを築き、一里くづに拵置ならば、然るべからん。され共、松は彼道端の並木と、まがひもすべき間、いかゞ仕べきやと、上意を伺ひけるに、大炊が申所尤至極せり。一里塚には餘の木を植へよと有しに、大炊老年にて、耳遠く、承り違て、板を植させける。云云。按るに、一里塚の事は前條をよとせんか。利勝が命を受たるは、並松の事のみならん。

【將軍家御上落日次】 當代記云。慶長十年二月廿四日、右大將軍、立江戶、宿々日次之事。三月二日、蒲原。三日、府中。四日、藤枝。云云。是右大將拜賀の爲也。

【島田洪水】 當代記云。慶長十年四月節々雷二三度、風惡、寒、廿四五日頃、遠江駿河大水、島田茶屋流、自此時、町川成之間、町東島田町建。云云。

【富士三區三茄子】 傳云。慶長十一年、當城御隱居の時、御愛妾某、江戸は大都會の地、然るを捨て此小色に御坐を移させらる、其意得がたしと言上す。東照宮笑はせられ、一に富士山あり、是三國無双の名山にして、常に見るに飽す。二に鷹よし、吾又放鷹を好む事、汝等が知る處也。三に茄子を名産として、其出る事の早き、他國にまされるのみにあらず、味ひも又佳し。故に此三の物を愛して、此國に住也と、上意有り。云云。或云。武州谷中、瑞應山南泉寺、堪然和尚筆記云。當國第一富士、第二愛鷹、第三茄子の價と記せり。是尚きを云へる滑稽也。今の世、此三を夢みるを吉とす、是より始る也。云云。

【頼宣君武備】 傳云。慶長十九年十月初日、常陸介頼宣君に、黒御紋白御旗七本、中黒御幕、金

幣の御馬印を進せられ、熊子の懸領たる旨、上意あり。云云。紀公言行錄云。大坂御陣の前に、頼宣君大願は、朱の六幅掛の四半に、白き丸也。御物語に、權現様の御意には、四半物打掛に、紋附るは、上差圖也。出来して、淺間社にて張せ見たるに、白丸上へあがりたるにて、殊の外美事也。家中紺地四半、金の丸も上へあけて附べしと、御意也。其時我持弓、持筒六組の白鹿雜、朱餅の小旗も、長七尺也。是權現様、十人の御鐵炮頭、白しなひの尺を模したる也。以來寸尺を違べからずと、御意也。御先乗の者頭、或は年老の言を聞、足輕しなひ、尺すきたりと、申を御聞、廣の御殿、御門番に出たるを、御出なされ候、召候て、先乗同心の稻尺、長過しと云者これ有よしあれば、權現様、十人の御鐵炮組、白しなひの寸尺を模したる也。權現様、御定の寸尺を、長すきたるとの批判推察也と、御叱也。云云。御若年にして、武備に精し、威すべし。

【中川某居物切妙手】 校合雜記云。中川左平太某は、權現様へ、居物切の御指南申上られし人也。様物の節或は道具を引とく見られ、是はあばら二枚半かゝり候よし申され、土履の中へ、大きな石をすゑさせて切られけるに、果して二枚半かゝりける也。いく腰も道具を引申さるゝに、毛頭も違なかりし也。

【守教】 駿河土産云。慶長十二年口月口日、神君府中城に御隱居の時、本多佐渡守正信に仰て曰、予戦國に生れ、學問の隙なく、一生文盲にて年よれり。去ながら、老子の足る事を知る者は、常に